

ハビトゥス概念再考

——社会科学と神経科学の交差点へ——

Repenser le concept de *l'habitus*

——Au carrefour des sciences sociales et des neurosciences——

平 田 周

Shu HIRATA

Abstract

Dans le domaine des recherches relatives au cerveau, qui connaît un essor, s'établi de plus en plus précisément le mécanisme de l'organisation des réseaux cérébraux. Par contre, selon Catherine Malabou, philosophe française, on n'a pas assez d'élaborations pour approfondir la compréhension philosophique du lien entre le biologique et le mental. Comme si on arrêta de penser face à la rénovation de l'humanité portée par la neurobiologie, en se contentant d'afficher un drapeau spiritualiste, c'est-à-dire l'irréductibilité du mental au physiologique. D'une façon autre que cette approche, cet article se situant dans l'histoire des idées essaie de reprendre le concept de *l'habitus* afin de faire un pont entre les sciences sociales et les neurosciences et de penser une articulation entre le neural, le mental et le social. A cette fin, est interprétée la portée de ce concept élaboré par le sociologue Pierre Bourdieu et élargie par Jean-Pierre Changeux dans le champ de la neurobiologie.

問題の所在

あまりにも月並みで自明なことだが、私たちは日々体を動かして社会生活を送る。朝起きて身支度を整え、朝食をとり、各々が学校、仕事場、歓楽地といった様々な行き先に歩いたり乗り物を利用したりして向かう。その先は省略するが、1日を終えまた次の1日を迎える日々のリズムのなかで営まれる生活は、意識的であれ、無意識的でなかば機械的であれ、身体化され、社会化されることを通じて可能になる。例えば、箸の握り方やフォークとナイフの使い方といった食事の所作を一つとっても、私たちの振る舞いは社会化されていると同時にそうした社会的エチケット（テーブル・マナー）は身体化されてもいることがわかる。あまりにも自然なものとなっているため意識的に注意を向けなければ反省の対象とならないこうした身体化と社会化という二重の過程はその結節点を有している。それを、国際的に最も読まれ引用されるフランスの社会学者・人類学者の一人である

ピエール・ブルデュー（1930-2002）は「ハビトゥス（habitus）」と名づけ、彼の行為や実践の理論を定式化するにあたって中心的な概念として用いた。本稿は思想史（histoire des idées）の領域においてこのハビトゥス概念およびそれに神経学的基盤を与えようとしたジャン＝ピエール・シャンジュー（1936-）の試みを検討するものである。ブルデューとシャンジューによる理論的対話の分析を通じて本稿は、社会科学と脳神経科学という異分野間の交流によって得られる領域横断的な知見とその含意を明らかにすることを目的とする。

この企ては、次のような一連の三つの文脈を踏まえることでよりいっそう正当化されるように思われる。第一の文脈として、脳神経科学における実証研究が飛躍的に進展したことが挙げられる。その歴史的重要性をシャンジューは次のように要約する。すなわち、神経科学における研究の進展は、「その重要さに比肩しうるものとしては、今世紀初頭の物理学、あるいは50年代の分子生物学くらいにしか見られないような発展を遂げた。シナプスとその機能の発見は、それがもたらしたことの重要性からすれば、原子やデオキシボ核酸の発見を思い起こさせる」（Changeux 2012（1983）：7-8=1989: vii）。シナプスの機能の解明がDNAの発見と同等の価値を有すると書かれた著作の標題は、精神分析家でジャック・ラカンの娘婿として知られるジャック＝アラン・ミレール（1944-）から投げかけられた『ニューロン人間』という呼称を皮肉も交えながらそのまま採用したのとなっている（Changeux 1979）。この標題によって示されているのは、脳の機能の解明による広義の生物学の刷新であり、人間像の大きな変化である。このことが第二の文脈と結びつく。シャンジューが哲学者ポール・リクール（1913-2005）を相手として出版した著作『自然と規則 [原題]』のなかで（Changeux et Ricoeur 1998=2008）、リクールは、「脳は考える」のような、ニューロン・システム [神経系] の働きと心の働き、あるいは「観察される心 [身体]」と「体験される心 [身体]」の混同を棄却することを前提として議論を進める。こうしたニューロン・システムと心的なものとの断絶に加えて、リクールは規範や禁止といった法に関わる社会の領域も異なる規則を有するものとして扱う。つまり、心的システム、生理学的システム、社会システムの三つの領域の独立性を保持することがリクールの哲学的立場である。しかし「精神」や「心」の自律性を掲げ、神経科学、脳科学によってもたらされた知見との接続可能性を問わないまま伝統的な唯神論（spiritualisme）の立場に留まることで十分なのであろうか。この問いに対して、第三の文脈をかたちづくるカトリーヌ・マラブー（1959-）ははっきりと否と答える。マラブーは、脳の「認識」だけでなく脳を「意識」することも重要であるという主張を込めた『わたしたちの脳をどうするか』のなかで、シャンジューとリクールが還元主義と反還元主義との二者択一にはまり込んでいることを指摘する（とりわけ神経系を考えることの単なる生理学的基盤とみなすリクールを批判する）（Malabou 2011（2004）=2005）¹¹。より最近の『知性の変容——人工知能の脳をどうするか』に至るまで、マラブーが一貫して取り組んでいるのは、心的なものへの還元不可能性というよりも、生物学と哲学、脳と心、事実と意味、そして「生物学的なもの」と象徴的のものとの間にあって、それらを切り結ぶものを探求することにある。

リクールとマラブーの立場をめぐる議論は本稿が扱う直接的な主題ではない。しかし、ブルデューとシャンジュー、社会科学と神経科学の思想的交差を吟味するという本稿の課題にとって、両者の還元不可能性よりも、両者を切り結ぶ観点が重要である。本稿では、文系か理系か、説明か理解か、といった二項対立ではなく、文学から自然科学までをも「解釈的实践」と捉えたアメリカのプラグマティズムの哲学者リチャード・ローティのように、社会科学と神経科学を「連続体」として思想的に論じることを試みる（Rorty 1982; 吉川 2013: 320）。

上記の視座のもと、以下では三つの節に分けて、社会科学と脳神経科学の理論的対話の一事例としてシャンジューによるブルデューのハビトゥス解釈を取り上げ、その含意を明らかにする。まず、ブルデューの一連の概念的道具立てとともに、ハビトゥス概念を検討する。それは、「界」や「文化資本」、そして「正統性」といったブルデューの社会学を特徴づける他の概念のなかで位置づけられるものである。次に、シャンジューのブルデュー解釈において前提にされている「シナプスの選択的安定化による後成説」を主としたシャンジュー自身の神経科学的知見を概観し、最後にシャンジューによるブルデュー解釈を検討したい。とりわけその解釈のための導きの糸として、身体化と社会化の過程に含意されている個体発生と系統発生という進化論的な歴史に焦点を当てる。

1. ハビトゥス、文化資本、界、正統性

身体化と社会化を含意するハビトゥスは、過去の経験的蓄積によってかたちづくられる習慣的・持続的性向 (disposition)、言い換えれば、個人や集団が物事を知覚・評価し行為に向かう際に無意識的に依拠する図式を意味する (加藤 2015: 23)。この定義において現れる「性向 (disposition)」という言葉は、「気質」、「性格」、何かを行う「能力」と無関係なものではなく、心理学的な意味での「パーソナリティ」に代えて、諸個人が習慣的に獲得したものの身体的・社会的側面を強調するものであるように思われる。こうした性向の体系としてのハビトゥスは、「体内化 (intériorisation = 内面化)」と「外在化 (extériorisation)」の過程をもたらす社会的環境なしには存在しない。そうした社会環境は、「社会的世界」や「社会空間」という言葉によってブルデューが指し示すものである。当時支配的であったマルクス主義的な社会学に反対して彼自身が挑発的に述べたように、「社会科学が構築すべきなのは階級ではなく社会空間」である (Bourdieu 1994: 54=2007: 65)。

この社会空間は、個人が属する社会階級のみならず、社会的出自、学歴、性差などを変数として構築されるものである。それゆえ、ハビトゥスの概念を導入するにあたって、物的資産や金融資産としての経済資本だけでなく、親の職業・学歴に由来する教養・趣味である (ブルデューの別の言葉を用いれば「遺産相続」した)「文化資本」の概念が導入される。こうした教養と趣味によって、個人は、文学、音楽、映画、ファッションなどの好き・嫌い、良い・悪いといった分類・評価するだけでなく、それを通して、個人とそれが属する社会集団は自らのライフ・スタイルを分類されるのである。つまり、「趣味は分類し、分類する者を分類する」(Bourdieu 1979: VI=1990: I, 11)。したがって、趣味はこれまで考察の対象とされてきた美学の領域から引き離され、社会学的分析の対象として据えられる。その分析をまとめた著作こそが、1979年に刊行され彼の国際的評価を確立した著作『ディスタクシオン [卓越性]』である。ただし他人との違いを求める傾向としての「卓越性 (distinction)」に関する分析は、人間の行動原理を差異化への欲望にあるということを示すのではない。ブルデューが明確化しているように、それは、ソースティン・ヴェブレン (1857-1929) が『有閑階級の理論』(1899年)のなかで提起した「顕示的消費」の概念とは異なり、「行為者の社会的トポロジー」を対象としている (Bourdieu 2003: 195=2009: 230)。

「社会的トポロジー」とは、行為者が社会空間において占める「場」、すなわち位置やランクを考察するものである。そして社会全体を表現する社会空間は、部分社会としての「界」(fr. Champ, eg. Field)に分けられる。マックス・ヴェーバー (1864-1920) が近代社会を「世俗化」として特徴づけ、さらに専門化と分業化の過程として描き出したように、社会空間は自律性をもった様々な

「界」に分化されていく。例えば、経済界、政治界、芸術界、宗教界、さらには、経済界には商業界、工業界、金融界などの下位区分が生み出される。諸個人はそれぞれの界に属し、そこでの位置と移動の軌跡によって客観的な諸関係を築き上げる。そして「界」という概念によって、諸個人や諸集団が「社会的拘束」にあること、言い換えれば、社会的に条件づけられていることが示される。しかし、このことは、諸個人の位置や軌跡が機械的に決定されることを意味しない。つまり、ブルデューは、サルトルに代表される実存主義とレヴィ＝ストロースを主とする構造主義の対立によって提起される主体主義か客観主義か、という偽の二者択一を拒否する (Bourdieu 1980=1988)。地方の一般家庭に育ちながらコレージュ・ド・フランスの教授にまで昇りつめた自らの人生の軌跡に暗示されているように、ブルデューは、社会構造に還元されることのない性向の体系の創造的な組み替えを強調するのである。

社会科学の独自の対象は (中略)、歴史的行為による二つの現実化の間に成立する関係、つまりハビトゥスと界との関係です。ハビトゥスとは知覚図式、評価図式、行為図式の体系、持続が可能で組み替え可能な体系ですが、この体系は社会的なものが身体のなかで成立した結果です。界とは、さまざまな客観的關係からなる体系ですが、この体系は社会的なものが、物のなかに、あるいは物理的対象とほぼ同じリアリティを有するメカニズムのなかに成立した産物です (Bourdieu 1992: 102=2007: 168)。

個人と自然ないしは物理的環境はともに身体化され社会化されたハビトゥスと界として現れる。この二つの関係において、個人が社会によって構造化されると同時に社会に働きかけるという「再帰的」関係、循環構造が存在するが、ここで強調されるべきは、様々な界に分割された社会空間において、諸個人の文化資本は不均等に配分され、また不平等に再生産されるということである。つまり社会空間は階層化され、社会において観察される多様な趣味はそれぞれ対等なものとして存在しているわけではないのである。文化資本は、『ディスタンクシオン』のなかで繰り返し用いられ、その概念装置の核心である「正統性」によって測られる。ジャン＝ルイ・ファビアニが指摘するように (Fabiani 2013: 73-74)、『職業としての政治』(1920年)のなかで物理的暴力の独占に国家の正統性を見たヴェーバーに倣うかたちで、ブルデューは、文化的正統性の概念によって、文化における卓越性をめぐる競争が生じたり、その生産物が承認されたりする社会的メカニズムを理論化する。ここで、ある文化の正統性、つまりそれを象徴的に根拠づける力は、そのことに利害関心を持つ集団から生まれるが、この正統性の付与は、「正統性の力の基礎にある力関係」が隠蔽されたままにあることを条件としている (Bourdieu 1979: 26; Fabiani 2013: 74)。

つねにそれとして意識されず不可視のまま個人に課される文化的正統性 (ブルデューが「象徴的暴力」とも呼ぶもの) は、『ディスタンクシオン』のような文化社会学の分野からブルデューがそれ以前にジャン＝クロード・パスロンと共同執筆した『遺産相続者たち』(1964年)や『再生産』(1970年)のような教育社会学の分野に遡って考察するとき、不平等に関わる「支配」の問題として現れる。ブルデューが果たした教育社会学への貢献として、経済資本のみならず、文化資本を有する学生が高い学歴・社会的地位を占めることを論証し、教育と社会的不平等の再生産との関連を明らかにしたことが挙げられるが、そこでの問題は文化的正統性 (およびそれを持つものと持たざるものとの関係) が学校という機構を介して再生産されることの問題として置き換えることができる。

このようにブルデューが学校教育における不平等の告発から出発したとすれば、哲学者ジャック・

ランシエールは平等を肯定することから独自の思想を築いた。曰く「正統性とその合理化に関するヴェーバー的分析は、課された文化的正統性の効果が、行使された象徴的暴力の定義そのものからして再生産されざるを得ないということを示している」(Rancière 2003: 365)。言い換えれば、機会の平等という理念の実態を暴露し、労働者の息子と中間管理職の息子が学校で受ける評価が違うということを示すことで、私たちは何を得たのか、とランシエールは挑発的に問いかけるのである。実際、ブルデューの分析によって、社会的に不利な位置に置かれた生徒が正統な文化に近づくことができないことが明らかとなり、その事態に対処するための処方箋が与えられたとしても、少なくともフランスではそこから期待された改善結果は得られなかったのである。それゆえ、「不平等を解明すると言いながら、それを強めることになった」、つまり不平等の再生産の告発は、不平等を解決するどころか、そこに不平等があるのだという印象を強化し固定することにしかならなかったのだとランシエールは述べるのである (Rancière 2004: 99)。しかし、こうした批判は、ブルデューの理論的価値というよりも実践的帰結に関わるものである。より正確に言えば、「支配の問題系に文化的消費のあらゆる意味を持ち込む正統性の理論」によってもたらされる結果だと言えるが、そこで示された文化的なものの社会的階層化が現代に到るまで存続していることを否定することは難しい (Fabiani 2013: 76-79, Coulangeon 2011)。

以上の議論に加えてランシエールは、社会空間を描き出す「科学者」としての位置から社会的個人の「誤解」を暴き出すブルデューの企てを痛烈に批判した (Rancière 2007 (1983)=2019)。この批判は、ブルデューと共同研究を行いながらも後に袂を分かち、ポスト・ブルデュー派の社会学者として知られるリュック・ボルタンスキーにも一定の反響が見られる。ボルタンスキーは、自らの立場をプラクティズム的批判社会学として規定する著作のなかで次のようにブルデューについて述べる。「自らの科学的啓蒙を通じて見識のある社会学者と幻想に捉えられた普通の人々との間の非対称性は、フィールド調査によって確認されないように思われるばかりか、さらには、新たなタイプのプラトンの観念論——論争的な表現で、ジャック・ランシエールが『哲学者とその貧者たち』で示したように——に回収されるリスクを抱えているように思われるために拒絶されたのだ」(Boltanski 2009: 46)。

ここではこれ以上論争の詳細に分け入ることなく (すでにこの主題には一冊の研究書が存在する (Nordmann 2006)), 距離をとって少し卑近な言葉でこれらの批判を要約するならば、ブルデュー社会学は、「上から目線」なのである。確かに彼の著作にそうしたものが感じられなくもないように思われる。また、交換と分業によって特徴づけられた社会に生きる私たちはみな自らの体についての生理学的・医学的な専門知識や社会を動かす経済や政治システムに関する知見をもっているわけではないし、もつべき必要もあるわけではないのかもしれない。

それにもかかわらず、ブルデューが切実に願っていたのは、普通の人々に、侮蔑ではなく、必ずしも自らで手にすることのできない反省の手段・方法を提供し、自らのなかにある社会的なものの痕跡を発見し、共有していこうとすることであったように思われる²⁾。ブルデューが自ら述べるように、教育社会学、文化社会学、そして『国家貴族』(1989年)に代表されるような国家社会学における自らの仕事に共通するのは、「わたしにとって社会的無意識を究明するという同一の営為の三つの段階であった」(Bourdieu 2003: 356=2009: 79)。そしてこの「社会的無意識」は、自己を振り返り、反省すると同時に自らの行動がもたらした結果に自ら対峙するという二つの意味で、「反省性 (réflexivité= 再帰性)」を通して発見される。反省といっても、それはかつて哲学や心理学において用いられた「内観」を通してではない。人は必ずしも自らのことを知っているわけではない

し、自己反省することでそうした認識に辿りつけるわけでもない。一定数の諸個人の経済資本と文化資本に関するアンケート調査を実施し、それに統計処理を施すことで集団・階層の分布を示す社会空間を描き出そうとしたように、こうした反省は科学的な手続きを経た客観的な与件を材料として、また観察者をも観察することを条件に遂行されるのである。この節で論じてきたハビトゥスは、こうした社会的無意識を顕在化させるための最たる概念である。では、このハビトゥス概念を通じた身体化と社会化の過程は、いかに脳の物質的過程と心的過程についてシャンジューが明らかにした認識と切り結ばれるのであろうか。

2. シナプスの選択的安定化による後成説

シャンジューの経歴に簡単に触れておけば、彼は、1965年にノーベル生理学医学賞を受賞し日本でも広く読まれた『偶然と必然——現代生物学の思想的問いかけ』（1970年）の著者でもある分子生物学者ジャック・モノー（1910-1976）の共同研究者であり、1972年からはパストゥール研究所の分子神経生物学チームの主任を、1975年から2006年にかけてフランスの最高学府であるコレージュ・ドゥ・フランスで「細胞間の情報伝達(Communications cellulaires)」講座の教授を歴任した。シャンジューの述懐によれば、『ニューロン人間』は、この講義の参加者に向けて書かれた一般書であり、当初500部ほどの売り上げしか想定していなかったが、結果として20万部のベストセラーとなった。

古代ギリシャ哲学の専門家で、アリストテレスから神経科学における人間性の変化を論じた著作のあるフランシス・ヴォルフは、『ニューロン人間』（1983年）の刊行30周年を記念して出版された論文集のなかで、この著作がもたらしたインパクトを次のように述べる。「[[それは] 実際には生物学において画期をなしただけでなく、人文学におけるパラダイム転換を果たした。その転換を次のような表現で要約することができる。すなわち『構造的人間からニューロン人間へ』と」(Wolff 2016: 42)。

この著作の第一章からしてきわめて優れた脳科学小史と評される(山本・吉川 2016:88-89)が、中心的な問いかけの一つは、遺伝子的な決定因子から脳の神経系の構成を説明できるのか、ということにある。この問いかけは、モノーとともにノーベル生理学医学賞を受賞し、シャンジューの先輩格に当たるフランソワ・ジャコブ(1920-2013)の『生命の論理』(1970年)に見られる「[サイバネティクス機械]としての生体組織という概念」、すなわち自動車の設計図のような「プログラム」が脳の形成に作用しているという思考モデルに反対して提起される(Changeux 2012: 238-1989: 277)。そこから導き出されるのは、「遺伝子の力」は存在するとしても、ニューロンの結合関係を支配しているわけではないというものである。その論拠は動物と人間の間には遺伝子の数には大きな違いが見られないのに対し、脳細胞の数には著しい相違が観察できるという事実にある。少し長くなるが、『ニューロン人間』から引用しよう。

逆説はハツカネズミから人間に移るときに現れてくる。大脳の細胞数はおおよそ500万ないし600万から何百億という数に飛躍的に増大する、つまり大脳の組織構造とその現実に行使される能力のほうは劇的に高度化しているのに、受精卵の核に存在するDNAの全体量には有意の変化がないのである。10パーセントの差を無視すれば、その量はハツカネズミとチンパンジーと人間とで変わりはない。DNAの含有量と大脳の複雑性との間には注目すべき非平行関係(non-

linéarité) が存在するのである。人間に着目するとき、逆説はさらに鮮明になる。人間の脳のシナプスの数(中略)を前にしたとき、20万あるいは多く見積もってもたかが100万ほどの遺伝子が何になるであろうか。ゲノムの組織構造の複雑さと中枢神経系の複雑さとの間に、単純な対応は存在しえない。(中略)「一遺伝子-酵素」は、決して「一遺伝子-シナプス」とはならないのである。(中略)それでは、高等脊椎動物の中枢神経系のかくも複雑な組織構造が、再現性のある仕方では、かくも少数の遺伝子的な決定因子から出発して構成されることを、どのようにすれば説明できるのであろうか」(Changeux 2012: 231=1989: 268)。

人間の脳の質量の増加は、大脳皮質のニューロンがその誕生の何週間も前に分裂をやめてしまっているにもかかわらず、軸索や樹状突起が生まれ、最終的におよそ150兆ものシナプスが形成されていくという事実と一致している。DNAの数とシナプスの数のあいだに見られる「非平行関係」に関して、シャンジューは『ニューロン人間』が刊行されて30年後に振り返り、人間の脳の発達に長期にわたる事実を例として、その関係性を強調する。そしてこの観察から検討されるべき「シナプスの組み立て (l'assemblage de la synapse)」, すなわちシナプスのレベルで生じるニューロン網の形成の問題に対する答えは、「前成説」, 現代的に言えば遺伝的決定論ではなく、「選択的安定化による後成説 (l'épigenèse = 後発生)」である。マラブーが指摘するように、こうしたシャンジューによって理論化された脳の後成説は、遺伝子と環境との関わりを研究する分野である「エピジェネティクス」と密接に結びつきがある。とりわけ双方の接頭辞「epi」が含意しているものに関してマラブーが述べるように、「エピジェネティクスが研究しているのはある遺伝子を活性化させたり、させなかったりして、機能を変化させるメカニズムである。この変化ではDNA配列自体の変更はないため、エピジェネティクスは細胞の「表層で (epi)」作用すると言われている」(Malabou 2014: =2018: 145)。30年を経てなお、シャンジューは確信をもって、脳の後成説を語る。

人間の脳の発達にある主要な特徴の一つは、遺伝学者や分子生物学者によってしばしば過小評価されるが、それは、脳の発達が、ニューロンの総数が大して変化することなく、誕生から15年間続くということである。子供は、成人の脳の5分の1の重さの脳をもって生まれる(それに対して、チンパンジーの場合は成体の40パーセントの重さをもつ)。そして、大脳皮質のシナプスの半分以上が、生後に形成されるのである。それゆえ人間の新生児は、生きるために、直ちに家庭環境や社会環境によって担われなければならないのである。このことが意味するのは、ダーウィンの進化的な進化が、自らの存続に適した社会環境のうちで自らの脳を作り上げることに生活の時間を多く費やす種の遺伝子を選択したということである。(中略)『ニューロン人間』の根本的な主張は、この非平行的な逆説が、(この著作の第7章のタイトルである)「後成説」によって主に解決を見出すということであった」(Changeux 2016: 130; Changeux 2012 (1983): 246=1989:287)。

これまで見てきた二つの引用の内容を別言すれば、遺伝子のレベルではチンパンジーと人間はきわめて近いにもかかわらず、両者の間で脳の機能は異なっており、大脳皮質のシナプスの増殖は、人間においては子供が誕生した後に生じる。このシナプスの増殖期間が人間においては引き延ばされていることから、シナプスの選択的安定化による後成説において重要な役割を担うのは環境であり、その脳への文化的刻印であるとシャンジューは言うのである。

シャンジューの問いかけを繰り返せば、遺伝子的な決定因子から脳の神経系の構成を説明できる

のか、というものであった。それに対する答えは、これまで見てきたように、自動車の設計図のようなアプリアリな遺伝子の力というよりも、シナプスの選択的安定化による後成説にある。すなわち、大脳皮質におけるシナプス結合は、社会的・文化的環境との接触、交渉、相互作用を通じて選択的に行われるのである。彼が手短かに述べているように、「神経細胞間のシナプス結合は、コンピューターにある回路のようにではなく、選択を介在させる試行錯誤の過程を経て行われる」(Changeux 2006: 149)。

遺伝と環境の間で、細胞の「表層で (epi)」, 試行錯誤の選択を経てシナプスが脳内で結合される過程が対応する具体的な現実の事例とは、学習である。「学習とは、ある特殊な活動状態が神経系に残す物質的痕跡である」(Changeux 1979: 140)。ここに脳神経科学の領域を超えたシャンジューの哲学的含意が見られる。それは心的過程と物理的過程が相互に対応しながらもどちらか一方に還元されることなく進展するスピノザ的な心身平行論として特徴づけられる。すなわち、「心的な出来事と物理的な出来事を同一視する」という立場である (Changeux 2012 (1983): 334=1989: 392)。

3. シャンジューによるブルデュー読解

シャンジューの論文「ハビトゥスのニューロンの基礎」は、その標題が示す通り、ブルデューのハビトゥスの概念に神経科学的基盤を与えることにある。さらにつけ加えられるべき別の動機としては、心身二元論や唯心論でも機械論的唯物論でもないブルデューの理論的枠組みのうちに、シャンジューが今日神経科学で一般的である急進的な経験論(エリック・カンデル)や生得論(スティーブン・ピンカー)の立場とは異なる、「生まれながらの傾向と獲得された傾向との相互作用」に関する認識を提供する可能性を見たためでもある (Changeux 2006: 145)。アプローチとして、シャンジューは、ブルデューが脳に関して論じるテキストを確定し、それにこれまでの自らの研究を重ね合わせている。より正確に言えば、シャンジューは、コレージュ・ドゥ・フランスでかつて同僚であったブルデューが自らの著作を参照している部分を踏まえつつ、ブルデューの理路から逸脱する危険を踏まえた上で彼が身体について語ることを脳に置き換えながら、ハビトゥスに神経科学的読解を施す。この論文のなかでは、多くのブルデューのテキストが引かれているが、彼の著作『パスカルの省察』(1997年)と対談『リフレクシブ・ソシオロジー』から一つずつだけ引用する。

傾向を語るということは人間の身体の自然な傾向性を確認しているだけのことである(中略)この唯一の傾向性は、非自然的な、恣意的な諸能力を獲得する自然な能力として条件づけられる可能性にほかならない。獲得された傾向の存在を否定することは、人間の場合、シナプス結合の強化や弱体化によって行われる身体を選択的・持続的変化としての学習の存在を否定することに等しい(Changeux 1983 [=1989])。 (中略)ハビトゥス概念は、(中略)社会的経験のなかで獲得された組織化原理を実践に投資するところの社会化された身体の能力である (Bourdieu 2003: 197-198=2007: 232-233)。

ハビトゥスは(中略)社会構造それ自体の身体化——社会化という歴史過程を通じた個体発生——の結果生まれた実践的な知覚図式を投入していますが、社会構造それ自体が先行する世代の歴史的作業——系統発生——から生まれたものです (Bourdieu 1992: 113=2007: 182)。

第一の引用において明らかなように、ブルデューが身体について語ることを脳に置き換えることは、彼自身がシャンジューの『ニューロン人間』を参照しているという事実によって正当化される。言い換えれば、身体において社会化された能力は、脳のうちに社会化された能力として置き換えられる。第二の引用は、ブルデューが、身体化（あるいは「脳化」）と社会化の過程を個体発生と系統発生の進化論的図式に結びつけたものである。ここで用いられた図式は、ドイツの生物学者でダーウィンの進化論の普及に貢献したエルンスト・ヘッケル（1834-1919）によって唱えられた「個体発生は系統発生を繰り返す」という生物発生原則から借り受けたものである。ヘッケルにおいては、系統発生は、ある生物個体の形成のなかで生じると想定された種の進化の歴史を指すが、それに対してブルデューにおいては、人という種の反復ならぬ受け継がれた社会的なものの反復として系統発生の語が用いられている。ブルデューによるこうした身体化 / 社会化と個体発生 / 系統発生の結びつきに、シャンジューは自らのシナプスの選択的安定化による後成説を適用する。

ここで再びマラブーの指摘は参考になる。すなわち、「ダーウィンにおいては、後成説は個体発生の理論であるから二次的であり、種の進化という概念よりも下位に置かれることになっている」（Malabou 2014: 141=2018: 152-153）。逆に、神経科学的に進化論を扱うということは、個体発生の役割（ここでは、大脳の神経網の形成および社会的なものの身体化）を主題に据えることなのである。

ブルデューの引用にあるように、系統発生は、「社会構造それ自体が先行する世代の歴史的作業」として、「社会的人間」を生み出す重要な役割を担っている。ここでシャンジューが個体発生としての神経網の組織化の例とするのは、先に見た人間の脳の特長としての学習能力である。とりわけ、文字を習得した人とそうでない人の脳の画像に見られるシナプス結合において著しく相違があるという事実である。このことが示すのは、文字という社会史上の発明が「先行する世代の歴史的作業」によって存続させられることで、「発達しつつある神経網の後成説的な獲得によって生じるニューロンの配分のかたちで具体化される」ということである。続けて述べられるように、「個人の脳は学習を通じて自らが所属する集団の社会・文化史にある特徴を獲得する。シナプス結合を果たす後成説は、世代の継起を通じて文化の発生とその伝承を保証するのである」（Changeux 2006: 150）。このことが、自らが属する文化における母国語、宗教的な象徴システム、道德規則を獲得する際の非自然的で、「恣意的な」特徴を強調し、また文化的刻印や教育の全般の特徴を例証する。こうしてハビトゥス、すなわち「身体における社会的なものの制定」が起きるのである（Changeux 2006: 151）。

ここでブルデューが社会空間の身体化について語ってきたことを脳の領域に拡大することで、シャンジューが社会空間の成立を生物学的な個人にまで拡張していることは明らかである。以下でシャンジューが脳と社会環境の間にある相互作用の関係を四つの水準に分けているように、ブルデューにおける個人と社会（個体発生と系統発生）の再帰的關係は、神経科学の領域にまで延長される。

- (1) 単純な有機体の最小意識の段階。表象を作り出すが、長期の記憶として保存し模倣することなくそれを用いる能力の段階。未熟児 25 週間から 30 週間の段階
- (2) 反復的意識の段階。物の使用、模倣、注意の共有によって特徴づけられる。人間の新生児の段階。
- (3) 自己意識の段階。二歳児の段階。鏡による自己承認、自己と他者の関係における行動規則の活用によって特徴づけられる。

- (4) 反省意識の段階。主観的経験の意識的關係づけの能力で、3～5歳の子供において発達する。感情移入 (empathie) —— 他者の心理状態の承認など—— および共感—— 他人に対する暴力に反対する傾向—— の性質が見分けられる。

この四つの水準が前頭前皮質の解剖学的機能 (系統発生) や成熟期 (個体発生) の発達段階に敷き写される。そうしてブルデューが構築しようとする社会空間が神経科学的に基礎づけられるのである。「これら継起する四つの水準が人間における社会空間の成立を条件づけている。ブルデューによれば、社会空間は、人間を構成する諸々の位置の自然な排他性、あるいはディスタンクションによって定義される。私のほうで付け加えるならば、社会空間は、社会的紐帯の多様な側面を形成する積極的な諸関係の複雑な網目によってもまた定義されるものである」(Changeux 2006: 155)。こう述べることで、第一節で見たような、ヴェーバー的な支配の社会学と結びついて描かれる卓越性を巡る闘争的な社会空間に、シャンジューは神経生物学の観点から様々な他者関係が築かれる平和的な社会環境の側面を付け加えるのである。以上のブルデュー社会学の神経科学的読解を通して、シャンジューが示すのは、脳の物質的過程、心的過程、社会的過程を統合的に説明する後成説の理論的強みであると同時に、そうした神経科学的読解を可能にするハビトゥス概念の射程の大きさなのである。

結論

シャンジューによるブルデューの読解を一つの事例として、本稿は、社会科学と脳神経科学の学問的対話の意義を解明することを目的としながら、第一にブルデューのハビトゥスとその他の概念との連関を、第二にシャンジューのシナプスの選択的安定化による後成説を検討した。ハビトゥスと後成説がそれぞれの学問分野で批判的議論を経て形成された過程を踏まえた上で、第三節で検討した身体化と社会化の過程にある個体発生と系統発生という進化論的な歴史観の独自性が浮かび上がるように思われる。

シャンジューがハビトゥス概念に見た「生まれながらの傾向と獲得された傾向との相互作用」は、ある意味で普通の人が日常のなかでも直観的に確認できるような一般的な認識であるのかもしれない。しかしそこから社会科学と神経科学において蓄積された知見を重ね合わせてみたときに、生理学的システム、心的システム、社会的システムが、還元不可能性を前提するのは違う仕方での切り結び、論じる可能性が生まれるのである。

2011年に出版された『フィルターバブル』のなかで、イーライ・パリサーは、グーグルなどの企業が検索エンジンをパーソナライズ化したことの帰結を批判的に検討した。インターネットのユーザーは検索が自らの閲覧履歴によって条件づけられることで、結果として自分と似た趣味の人々からなる共同体の情報しか得られなくなり、そうして選別された情報の「泡」に閉じ込められるというのである。2013年6月から始まるいわゆるスノーデン・ショックは、監視研究の第一人者ディヴィット・ライアンをはじめとして、多くの研究者に目まぐるしく書き換えられるプライベートとパブリックなものの境界線がもたらす危険に目を向けさせた。2016年以降、プレクジットに象徴されるような政治的变化を受けて、世界では「反知性主義」や「ポスト・トゥルース」などの言葉が流行したが、この間、情報化社会の到来が約束していたような様々な場所を接続させること

によってもたらされるユートピア的未来像とは裏腹に、社会はこれまで自らの存立を可能にしていた自律的な領域までもなし崩し的に壊してしまった印象を私たちに与える。

そのような時代情勢のなかで、学問的領域の横断ということに関しては慎重にならなければならないのかもしれない。それでも、シャンジューがブルデューを論じた論文の最後で、彼の同僚たちに呼びかけた言葉は、現代の私たちに向けられた言葉としても読めるのではないだろうか。「今や神経生物学者たちがブルデューを読む機は熟した。ブルデューの読解は神経生物学者たちを手助けし、あまりにも頻繁に私たちに苦しめる狂気に対する戦いにおいて科学的理性を揺るぎないものにしてくれるだろう」。

注

- * 引用に際して邦訳のあるものは適宜参照し、原書に照らして変更したものもある。先学の蓄積に感謝したい。
- 1) 意識研究という領域を開拓し、英語圏の認知哲学の「スター的存在」であるデヴィッド・チャルマーズも、マラーブールがリクールに対して行なったのと同種の批判を、心の内的な働きを「志向性」概念によって特徴づけるジョン・サールに投げかけている (Chalmers 2010: 15)。
 - 2) ここでは深く立ち入らないが、日本の社会学の分野でも、ブルデューに関する研究を踏まえながら、彼が個人と趣味の関係を示す社会空間を描き出すために用いる対応分析などの手法に批判的検討を加えつつ、ブルデューの社会学理論を現代にアップ・デートするための様々な議論が積み重ねられてきている (北田・解体研 2017)。

参考文献

- Boltanski L., 2009. *De la critique : Précis de sociologie de l'émancipation*, Paris, Gallimard.
- Bourdieu P., 2000(1979). *Esquisse d'une théorie de la pratique, précédé de Toris études d'ethnologie kabyle*, Paris, Seuil.
- Bourdieu P., 1979. *La Distinction: Critique sociale du jugement*, Paris, Minuit. (1990, 石井洋二郎訳『ディスタンクション (1), (2)』藤原書店。)
- Bourdieu P., 1980. *Sens pratique*, Paris, Minuit. 2007, (1988, 今村仁司・港道隆訳『実践感覚 (1), (2)』みすず書房。)
- Bourdieu P., 1992. *Réponses : pour une anthropologie réflexive*, Paris, Seuil. (2007, 水島和則訳『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』藤原書店。)
- Bourdieu P., 1994. *Raisons pratiques : sur la théorie de l'action*, Paris, Seuil. (2007, 加藤晴久訳『実践理性』藤原書店。)
- Bourdieu P., 2003(1er édition 1997). *Méditations pascaliennes*, Paris, Seuil. (2009, 加藤晴久訳『パスカルの省察』藤原書店。)
- Canguilhem, G. et al., 2003(1962). *Du développement à l'évolution au XIX^e siècle*, Paris, Presses universitaires de France.
- Chalmers D. J., 2010 "The Singularity : A Philosophical Analysis," *Journal of Consciousness Studies* 17(9-10): 7-65.
- Champagne p., et Christin O., 2012. *Pierre Bourdieu : une initiation*, Lyon, Presses universitaires de Lyon.
- Changeux J.-P., Courrèze P. and Danchin A., 1973. A Theory of the Epigenesis of Neuronal Networks by Selective Stabilization of Synapses, *Proc. Nat. Acad. Sci. (USA)*, Vol. 70, No. 10, pp. 2974-2978.
- Changeux J.-P., 1979. « L'homme neuronal, entretien avec Jean Bergès, Alain Grosrichard ; Éric Laurent et Jacques-Alain Miller », *Ornicar*, n° 17/18, pp. 137-174.
- Changeux J.-P., 2012 (1er édition 1983). *L'homme neuronal*, Paris, Fayard/Pluriel. (1989, 新谷昌宏訳『ニューロン人間』みすず書房。)
- Changeux J.-P. et Ricoeur P., 1998. *La nature et la règle : ce qui nous fait penser*, Paris, Odile Jacob. (2008, 合田正人・三浦直希訳『脳と心』みすず書房。)

- Changeux J.-P., 2006. « Les bases neurales de l'habitus » dans G. Fussman (éd.), *Croyance, raison et déraison*, Paris, Odile Jacob, pp. 143-158.
- Changeux J.-P., 2016. « L'homme neuronal : trente ans après », dans Wolff F. et Worms F. (dir.) *L'homme neuronal, trente ans après*, Paris, Éditions Rue d'Ulm / Presses de l'École normale supérieure, pp. 121-143.
- Coulegeon, P., 2011. *Les métamorphoses de la distinction*, Paris, Bernard Grasset.
- 加藤晴久, 2015. 『ブルデュー 闘う知識人』講談社。
- 北田暁大・解体研 (編著), 2017. 『社会にとって趣味とは何か』河出書房新社。
- Malabou C., 2011(2004). *Que faire de notre cerveau ?*, Bayard. (2005, 桑田光平・増田文一朗訳『わたしたちの脳をどうするか』春秋社。)
- Malabou C., 2007. *Les nouveaux blessés : De Freud à la neurologie, penser les traumatismes contemporains*, Paris, Bayard. (2016, 平野徹訳『新たな傷つきし者』河出書房新社。)
- Malabou C., 2014. *Avant demain : épigénèse et rationalité*, Paris, Presses universitaires de France. (2018, 平野徹訳『明日の前に——後成説と合理性』人文書院。)
- Malabou C., 2016. *Métamorphoses de l'intelligence*, Paris, Presses universitaires de France.
- 中村靖子, 2015, 「物語と虚構——フロイトのモーセ論」, 中村靖子 (編) 『虚構の形而上学——「あること」と「ないこと」のあいだで』春風社, 179 - 217。
- 中村靖子, 2018, 「共感し推論し予測する機械: ニュートン以後, フロイト, そしてそののち」『名古屋大学人文学研究論集』1, 73-97
- Nordmann C., 2006. *Bourdieu / Rancière: la politique entre sociologie et philosophie*, Paris, Editions Amsterdam.
- 大平英樹, 2015. 「意思決定という虚構」, 中村靖子 (編) 『虚構の形而上学——「あること」と「ないこと」のあいだで』春風社, 317-360。
- 大平英樹, 2017, 「予測的符号化・内受容感覚・感情」『エモーション・スタディーズ』第3巻第1号, 2017年10月, 2-12。
- Pinto, L., 2013. « Du bon usage de La Distinction », Coulegeon, P., et Duval, J. (dir.) *Trente ans après La Distinction de Pierre Bourdieu*, Paris, La Découverte, pp. 83-95.
- Rancière, J., 2007(1983). *Le philosophe et ses pauvres*, Paris, Flammarion. (2019, 松葉祥一・上尾真道・澤田哲生・箱田徹訳『哲学者とその貧者たち』航思社。)
- Rancière, J., 2003. « L'éthique de la sociologie (1984) » *Les scènes du peuple*, Lyon, Horlieu, pp. 74-111.
- Rancière, J., 2004. « Les usages de la démocratie » *Aux bords du politique*, Paris, Gallimard, pp. 353-376.
- Rorty, R., "Method, Social Science, and Social Hope," *Consequences of Pragmatism: Essays, 1972-1980*, University of Minnesota Press, 191-201. (2014, 浜日出夫訳「方法・社会科学・社会的希望」室井尚ほか訳『プラグマティズムの帰結』筑摩書房。)
- 山本貴光・吉川浩満, 2016. 『脳がわかれば心がわかるか』太田出版。
- 吉川浩満, 2014. 『理不尽な進化』朝日出版社。
- Wolff F. 2016. « Ce que L'Homme neuronal nous a fait penser », dans Wolff F. et Worms F. (dir.) *L'homme neuronal, trente ans après*, Paris, Éditions Rue d'Ulm / Presses de l'École normale supérieure, pp. 41-52.

[附記]

本研究は、課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業領域開拓プログラム（課題名「予測的符号化の原理による心性の創発と共有——認知科学・人文学・情報学の統合的研究」[研究代表者：大平英樹]）の助成を受けた。論文は、2018年7月29日に名古屋大学で行われた研究会で発表した内容がもとになっている。当日の発表で貴重なコメントをして下さった共同研究者の方々

に記して感謝したい。